

【基調講演】

演題 「保育における振り返りと実践の質向上」

講師 東京学芸大学 岩立京子先生

私は、「保育における振り返りと実践の質向上」という幼児教育に直接関わるお話をさせていただきませんが、先ほど安孫子先生のお話を伺いながら、共通点がたくさんあると思いました。安孫子先生がおっしゃった「生き抜く力」は、本日私がお話する「学びに向かう力」、「夢を叶えるのは人である」についても「質の向上の中核となるのは一人ひとりの先生方の力」になるのではないかと思います。思いながらお話を伺いました。

先生方もご存じのように、今、幼稚園教育要領の改訂作業が行われており、中教審教育課程部会の報告では、幼児期の終わりまでに育てたい姿として 10 の力が示されました。幼稚園教育の領域や基本は変わらないのですが、遊びの中の学びを意識して見取っていくことが求められていきます。私がいま関わっている教員育成政策の委員会の方でも数十年に一度という大改革が行われようとしています。中核となる先生方の資質向上に向けて、養成・採用・研修のそれぞれのところで大きく変わってくるということです。

今の幼児、児童が大きくなって活躍する頃には、少子高齢化で生産年齢人口も減っていきます。また、グローバル社会の中で技術革新がどんどん進んでいきます。今、教育改革というのは待たなしです。今の幼児が社会を担っていくその時は、本当にロボットが各家庭にいるようになるかも知れませんが、人とロボットの関係がどうなっているか、ロボットがどのような社会貢献をしていくのか、今とは大きく違う社会になるかも知れません。そのような時に、子どもたちの教育をどう考えていくのかということが大きな課題になります。

世界的な動向—OECD 報告書から

文科省や OECD の報告からも分かるように、そういった変化に対応するように、世界全体が近未来に生きる幼児の教育について議論を行っています。日本も OECD の会議には代表を送って、情報交換をしています。日本の幼児教育は質が高いと言われていますが、そこに安住しては幼児教育の専門性は向上できません。質が高いとはどういうことを言うのか、どのようなことを中心的課題として大切にしていかなければいけないのか、日本の保育を相対化した上で何を新たに学び合っていかなければならぬのかか変化していくように思います。

「保育の振り返りと実践の質向上」を考える時、やはり、保育者の先生方が日々の営みをどのように振り返り、明日に繋げていくのか、そして、その営みを通して、保育の質をどのように向上させていくのが大事です。今、幼児教育に対する社会的要請が高まり、保育の質の向上がキーワードになっています。もともと幼児教育は見えない教育だと言われていました。今日分数を教えたからといってすぐにテストが出来るというものではなく、目標である心情、意欲、態度そのものはすべて見えないものです。しかし、私たちは、子どもたちの仕草や表情から推論して見取り、育てていくわけです。見えないから観なくていいのではなく、見えないところを様々な手がかりからどのように観ていくか、そしてそれをどのように可視化していくかが問われています。見えないものを可視化して捉えようとしているのが世界的な動向です。

OECD が、幼児教育に焦点を当てて「人生の最初期から力強く（スターティング・ストロング）」という報告書を出していることから世界中が幼児教育に着目していることが分かります。

日本でも幼児教育は量的拡大から質の向上へと向かってきています。その背景には、質の高い幼児教育が幼児期以降の発達に及ぼす影響の実証的研究が蓄積されてきています。アメリカでは、ミシガン州で 50 年以上続けて研究されていますが、質の高い教育を受けた子どもが後伸びしている、人生で成功しているということを実証しています。教育の経済学という観点からも、幼児期の教育に 1ドル投資すると社会にいくら返ってくるか、その子とその家族を超えて、社会にとってどのくらいメリットがあるかという研究がたくさん行われてきています。「三つ子の魂百までも」ということわざレベルで幼児教育が語られるのではなく、実際に国にとって幼児教育がどれだけ大事かということが実証されてきています。

一方で、規制緩和や構造改革の中で幼児教育、保育施設が非常に多様化し、保育の質の低下が危ぶまれています。そのような時に家族の多様化と子どもの育ちを捉えて教育の質を保障していくのは簡単な問題ではありません。文科省の前幼児教育課長が「待ったなしの改革である」といっているのは、幼児期の教育の改革に日本の将来がかかっているということを示唆しているのかもしれませんが、ここに世界でセンセーションを巻き起こした図（幼児教育への投資効果—教育投資に対する収益率のイメージ）がありますが、幼児期の教育のすごさが分かります。幼児教育への投資効果が高く、幼児期に投資すると、ある程度の職業につけ、得られる年収も高くなる。また、逮捕歴（回数）は下がってくるということが図に示されています。質の高い幼児教育が、例えば、貧困や暴力が世代間連鎖してしまうような地区に住む子どもたちの運命でさえも変えられる可能性があるということが示唆されています。幼児教育は誰がやっても何をやっても同じではない、質の高い教育が貧困など非常に剥奪された環境の子どもたちに特に影響力が高いと研究で示されています。その実践では、今が楽しい、今が充実しているということを超えて、後伸びしていく、あるいは、人生で成功することが示されています。そこで着目されているのは、日本が大切にしてきた子どもを中心とした、主体的な遊びを基本とした保育であり、そこで育つ人とのかかわりや自己コントロールする力です。人生で成功するという「サクセス」の意味には、文化的意味合いの違いはありますが、ここで言うサクセスは、その子が希望を持って人生を選択でき、ある程度の収入を得ていくかという意味でのサクセスだと思います。

保育の質とは

それでは、保育の質とはどういうものをいうのでしょうか。様々な議論はありますが、「質」とは、1回…5回と量では捉えられないものです。例えば、避難訓練を月1回やりますが、回数ではなく、内容やそこでの子どもの学びなどが問われてくるのです。基本的に「量」ではないということですから、いろいろ観点から捉えることができます。

例えば、秋田先生と佐川先生はある論文のなかで OECD の観点を引用し、「方向性の質」「構造の質」「過程の質」「結果の質」にまとめておられます。「方向性の質」には、文化の方向づけや行政などが作る枠組みなどが入ります。今、幼稚園教育要領の改訂をしていますが、それを受けて来年度以降、全国的に説明が行われると思いますが、子どもの発達を見る観点として影響力をもってきます。「構造の質」は、教師対子どもの比率であるとか、比較の見えやすいものです。秋田先生が強調しているのは、「プロセス（過程）の質」です。ここには、保育・教育方法とカリキュラム、物理的環境、素材などが含まれます。また、結果として出来る、出来ないではなく、その子が学びに向かってどのように心情、意欲、態度を高めていくかが大事であり、

それを援助、指導する保育者のかかわりの質が含まれます。そして、それは、保育者の関わりで非常に違ってくるのです。「結果の質」は、日本ではあまり強調されていません。「結果（成果）の質」は、それをゴールにしているわけではありませんが、子どもが夢中になって遊び込んでいったときに結果として何が発達し、学ばれてくるかという結果（成果）の質です。私個人の研究では、自主性や主体性の高いお子さんの語彙力はとても高いという結果が出ています。ある園では教師主導の語彙の勉強やトレーニングをやっているわけではなく、子どもが夢中になって遊び込めるような保育を展開しています。その中で協調性や主体性が育ち、それに語彙が関連して伸びてきています。アメリカの研究では、縦断効果が示されている研究がありますが、私の研究では、年長児で遊び込むことで語彙が育っていることが示されています。日本では「構造の質」や「過程の質」に着目して研究されてきていますが、「結果の質」の研究も個人的には重要だと考えます。

保育の質の研究は日本でも実は以前から行われていました。2000年前後から静岡大学に当時いらした先生が、幼稚園や保育所の先生に、「どんな保育がいい保育でしょう？」と聞いて、その回答を分析されています。例えば、ここで言う「社会・文化システム」は、いわゆる「方向性の質」に当たります。「保育の外部システム」には、学校教育制度、保育制度、行政、保育者養成、保育体制構造の在り方などが含まれます。「保育体制」には、行政と園運営、管理、保育者集団、父母との関係などが含まれます。それから、「保育方法や形態」「保育のねらい・内容」「遊びの理解と保育者の関わり方」は「過程の質」にかかわる内容で、その先生がどのような保育方法を用いていくのか、保育のねらいや内容はどのようなものなのか、教育計画や指導計画の質はどのようなものなのか、幼稚園教育要領や保育所指針が改訂されたときには、それがその園の指導計画や教育課程の改善にどのように反映されているのか、日々の幼児理解や子どもとのかかわりは、どうなのかなどが含まれています。このように日本の研究でも、保育の質は、多様な側面から捉えられていました。

若い先生でしたら一日やるのが精一杯ですが、少し保育が見えてきた先生や主任の先生などは、こういった多層的な保育の質の側面あるいはそれに影響する多様な要因を考慮しながら保育の改革をしていっているのではないかと思います。

保育の質をどう可視化（測定）していくのか

欧米では、保育の質を可視化し、測定しようと色々なスケール（尺度）が開発されています。実は日本でも日本独自の尺度を作ろうという試みはありますが、それらが作られたとしても、トップダウンで現場に降りてきて、そのスケールでの理解や評価が求められるというようなものではなく、例えば、このようなものもありますよと、研究として報告されていくのだろーと思えます。が、それを基にして先生方が本来の建学の精神に基づいたそれぞれの園の大事にしている事や目の前の子どもと関連させて、本園ではどのように子どもを見ていくのか、保育の質をどのように改善していくのかを考える参考となるのではないかと思います。いずれにしても、スケール（尺度）開発というのは色々なところで行われようとしています。

保育の質に影響を及ぼす要因として、家庭の要因があります。一般的には、よく「あの親にしてこの子あり」と言っ、子どもの問題が親のせい環境がよくないから、子どもに問題が生じると単純には言えません。家庭環境が劣悪でも、保育の質が高いとその子どもの愛着が安定的に形成されるという研究もあります。今、発達や学びの連続性を踏まえた質の高い保育と

同時に、家庭との連携、子育て支援が幼児教育の課題の二大柱になってきています。双方が共によく機能するときに、子どもが最もよく育つということです。

アメリカ国立小児保健・人間発達研究所（日本でいう厚生労働省のような組織）は、保育者や親の養育の質について指標をつくっていて、0歳から4歳までの子どもの保育を見たときに、ポジティブな養育の必要性をあげています。子どもに対して温かくポジティブな養育をしているのか、一人ひとりの子どもを人間としてみて、毎日、子どもとフレッシュな出会いをして、その子の一日を支えるような態度を示しているのか、おむつ替えも形式的にやるのではなく温かい対話やアイコンタクトをしながらしているのか、子どもの発声や発話にしっかり対応しているのか、子どもに問いを発しているのか問い直す必要があります。こうなの？どうなの？と優しく問いを発し、共に考えることは、子どもの考える力を育てる重要なアプローチの一つと考えられています。その他、「子どもへ話しかけ（ほめる、学びの助けをする、お話を語ったり歌をうたったり）」、「発達を促す」、「読む力を伸ばす」、「社会的な行動の奨励」などという柱が、質の高い養育の指標として出されています。

保育の質に関する要因（秋田訳；Litjens,2010）

この図は、構造的要因と保育過程の要因と家庭の要因を並べたものです。「構造的要因」には、職員の教育資格研修職員の賃金、子どもと職員の比率、クラス規模、保護者や地域の参加関与、行政からの支援と公的資金補助、保育・教育の実施運営管理（リーダーシップの見直し）、園の評価・モニタリング等が含まれています。「保育過程」の要因には、職員、仲間の子どもたち、保育・教育方法とカリキュラム、物理的環境・素材・教材プロセスに関わるものが含まれています。保育者の関わりなども入ります。「家庭」の要因には、家庭、地域社会経済的地位、精神的健康、家庭の教育資源、読み聞かせ等の教育的関わり等が含まれ、これらが子どもの発達と相関が高く出ています。東京都区内でも足立区とか新宿区などでは外国人が比較的多く住み、半数近くが外国人というクラスがある園もありますので、そういったところでは多文化多言語の難しい教室の実態があると思いますが、質の高い保育が同様に求められます。日本に来たのだから、みんな日本語が分かって当然だと考えるのではなく、一人ひとりの子どもが国や自己のアイデンティティーを確立させながら、日本への適応を促していくための教育が必要になってきます。アメリカの文化的・言語的多様性の課題は日本の近い将来の課題ですので、日本でもより一層家庭と地域の連携が必要となってくるでしょうし、保育の難しさもでてくるのではないかと思います。質に関する課題は多岐にわたっていますし、今後もより一層重要になってくると言えます。

保育プロセスの質（STTEW）イギリス

これは、最近、秋田先生と淀川さんが翻訳したイギリスの国家プロジェクトとして行われている保育のプロセスの質（STTEW）の評価です。シラーズらは5つの領域にわたって保育者がどういう関わりをしていくかを第3者が来て保育者の保育を見て評価するスケールを開発しています。

1. 信頼、自信、自律、2. 社会的、情緒的な安定・安心感、3. 言葉、コミュニケーション、4. 学びと思考力、5. 学び・言葉という5つの側面から保育の質を捉えています。それぞれの側面に数項目ずつ、全部で14項目の関わりを、それぞれが不適切、最低限、良い、とても

良い関わりに分けて評価されるようになっていきます。言葉の発達に関する評価項目についてちょっと読んでみます。「不適切な関わり」とは、「子どもたちの言葉の発達を丁寧に見て評価するための観察をほとんど行っていない」、とあります。楽しそうなことを言っているようだ、何となく楽しそうだとすることは感じられても、複数の子どもは同時に話をしてくれますし、色々なグループが色々な遊びを展開する中で言葉を捉えていくのは、個人的には難しいと思っています。「最低限の項目」としては、「子どもたちが抱えている言葉の発達に関する困難にすぐ気づけるように理解したり評価したりし、その後の様子を丁寧に見ていく」こと、「良い項目」としては、「文脈によって使用される言葉が多用にあることに保育者が気づいている」、「家、保育施設、保育施設内の異なる場所、異なる保育者、異なる遊びで質が違ってくことに保育者が気づいている」等があります。それから、「とても良いという項目」では、「子どもたちの遊びを支えることが子どもたちの言葉の発達のために効果的であると保育者が認識している」、「言葉のトレーニングではなく、遊びの中で本人のいろいろな感情が伴った言葉の学びがあり、それが非常に重要であることに気づき、他者とのやりとりへの参加やより複雑な共同遊びへの参加を支え、その効果を注意深く見る」、つまり、自分が援助した後をしっかり見るということが含まれています。このようなスケールがそのまま日本で使えるかは別として、このようなスケールの開発が盛んに行われています。今後も保育の質については色々なところで出てくると思いますので、保育の何の質について話されているのかしっかり見ていくとよいのではないかと思います。

このように考えると、今また遊び中心の保育というのが、つまり、主体的に遊び込むことによって、集中することによって、思考力も言葉もその他、様々なものがそこから総合的に生まれてくるのだということが強調されてきているように思います。

小学校教育と幼児教育の接続

先月 11 日に、文部科学省中央教育審議会教育課程部会、教育課程企画部会で配られた資料（案）を見てください。今、保幼小の子どもたちの学びや発達の連続性を踏まえて繋いでいくことは世界的な課題となっています。幼児教育は、遊びや生活の中で幼児期の特性に応じた「見方や考え方」の枠組みや資質・能力を育む学びをこれまでも大切にしてきました。そして、今、学びに向かう力、安孫子先生がおっしゃった生きる力が大切だということが欧米の研究データで示されています。このような力が日本では以前から大切にされてきたので、これらの力をさらに確かなものとして、小学校のカリキュラムに繋げていこうとしています。一般的には 5 歳の後半をアプローチ期、小学校 1 年の前半をスタート期とし、両者をもって接続期としてかなり意識するようになってきています。この時期は、幼児の得意なところやさらに伸ばしたいところを見極め、それらに応じた関わりをしたり、より自立した生活や、遊びを通じた学び、創造的活動を促したりする時期です。すべての領域において、できるわけではありませんが、子どもは楽しい方向へ向かって生きる存在であり、得意なところ、嬉しいところに力を発揮していくので、そこを見極めて、それらに応じた関わりをしたり生活の自立や協同を促したりしていく必要があります。そのためには、意図的、計画的に環境を作っていくことが必要で、その中で、「見方や考え方」を育てていくことの重要性が示されました。こういったアプローチをしっかりすれば、生活科を中心としたスタートカリキュラムの中で、合科的、関連的な指導も含めて幼児期の終わりまでに育った力が発揮できるような教育を行いながら、幼児期に総

合的に育まれた「見方や考え方」や「資質や能力」を徐々に各教科の特質に応じた学びに繋げていくことができます。こうして、幼児期の教育は切り離されずに、幼小中高の改革の中に位置づけられてきています。

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿の10項目（健康な心と体、自立心、協同性、道徳性・規範意識の芽生え、社会生活との関わり、思考力の芽生え、自然との関わり・生命尊重、数量・図形、文字等への関心・感覚、言葉による伝え合い、豊かな感性と表現）は、基本的には小学校のいろいろな教科に関わるものとして図示されています。特に意識的に「思考力の芽生え」は、どの教科にも繋がっていくものとして示されています。思考力そのものは目に見えませんが、遊び込む中で学びの姿をしっかりと見取っていく、そして、記録を通してより深い学びへと誘っていくことが求められています。今の幼稚園要領は、3歳、4歳、5歳と分けて書かれておらず、入園から卒園までに育ってほしい力として領域別にねらいと内容が書いてあります。その中でも特にアプローチ期を意識してまとめたのがこの10項目です。これらを意識しながらアプローチしていくことで、それほど大きなギャップなく小学1年生に繋がっていくのではないかと考えられます。今、多くの小学校、教育委員会が接続カリキュラムを開発しています。国立教育政策研究所の幼児教育センターのホームページに入ってくださいと全国の保幼小の接続カリキュラムがデータベース化されて見られるようになっていきます。どんなところが接続の視点となっているか、アプローチ期とスタート期のどこが強調されているかを見ることができます。このデータベースは、誰が、いつ、どこからアクセスしても見られるということで、広く幼児教育の質の向上につながるのではないかと思います。

アクティブ・ラーニングの3つの視点を踏まえた、幼児教育における学びの過程のイメージ

今、幼小中高の教育改革の中でアクティブ・ラーニングがキーワードになっています。一人ひとりが学んで、知識を得て、テストでいい点数を取っていけば良いのではなく、生きて働く知識が求められる時代になりました。幼児教育では子どもの主体的な遊びを通じた学びを大事にしてきました。幼児教育において、幼児の自発的な活動としての遊びは、心身の調和のとれた発達の基礎を培う重要な学習として位置づけられています。

<遊びのプロセス例>

「遊びの創出→遊びへの没頭→遊びの振り返り→次への遊びの創出へ」

このような遊びのプロセスを導きたいということです。幼児教育は環境を通して行う教育なので、幼児一人ひとりの行動の理解と予想に基づいた意図的・計画的な環境の構成が必要です。先生方が書いてくださっている指導計画は、仮説としての理解や計画に基づいて展開しようとするのですが、子どもたちの動きによって柔軟に変わってくると思います。また、幼児期にふさわしい生活の展開、遊びを通じた総合的な指導、一人一人の特性に応じた指導、発達の課題に即した指導は変わらず重視されます。

より一層、強調されて来るのが主体的な学びの過程です。深い学びの過程、対話的な学びの過程、主体的な学びの過程があります。まずは幼児が安心して環境に働きかけ、見通しを持って粘り強く取り組み、自らの遊びを振り返って次の活動に繋げていくのかという主体的な学びの過程が実現できているかが大事です。この資料には、子どもがいかに仮説を立てながら思考

錯誤していくかの事例も載っています。日常、先生方が目にしている子どもの姿を記録として残し、連続性をもって深めていくことが求められてきています。

図のなかの幼児教育の三つの柱の真ん中に遊びを通しての総合的な指導があります。あくまでも、教師中心のトレーニングのような教育で育つ力ではなくて、遊び込んでいったときに子どもが自ら突き進んで獲得していく力が幼児教育において育みたい力です。その子どもの学びを読みとっていく保育者の力が求められてきています。

保育者による保育プロセスの振り返り

(幼児の豊かな遊びや生活を生み出すための日々の営みの質)

豊かなあそびや学びを支えるための教師の色々な営みがあるのですが、先生方の専門性はどこにあるのでしょうか。図を見ながら考えて行きましょう。

まず、幼児の理解です。保育者は教育計画、指導計画を立て、多面的に幼児理解をします。発達や個性を理解し、共に活動し、共に感じ、記録を取り、様々な映像、写真作品からドキュメンテーションなどの記録誌を作ります。

保育の計画も、入園から卒園までの教育の目的や内容を保証する教育過程、教育計画、その時々構想があります。これはおそらく幼児教育の専門家でなければできないものです。長い見通しで計画し、長い目で一人一人の子どもの発達をみるのが大事です。

環境構成では、物、人、空間、時間、事、全てをデザインします。教材も本物を使いたいと思ったとことん探求していくでしょう。ある先生がラジオでエルマーの歌を聴き、感動し、ぜひ子どもに歌わせたいと思い楽譜を探したが既に絶版になっていてどこにもない。しかたがないので音楽の得意な人に楽譜に起こしてもらおうとしましたが、どうしても聞きにくいところがあったり、納得がゆかない。私はその話を聞き、全国の図書館の文献検索をしたところ、ある短大に「幻の楽譜」がありました。それを取り寄せて園にもっていきました。先生方は、その楽譜を用いてエルマーをテーマに音楽活動をしたり、アートの活動をしたり、身体表現や言葉の活動をしたり、最後は全体を統合する形で、子どもの日頃の活動を活かしたミュージカルを子どもとともに作って行きました。エルマーの歌に出会わせたいという先生の気持ちから探求していくことがすばらしいと感じました。子どもは「いい歌だねえ」と音楽や歌をしつかり聴いていて、『ちえ』ってなあに？」と質問してきたそうです。抽象語で「知恵と勇気」という言葉が出てくるのですが、子どもはその言葉の意味が知りたい。その質問に先生は「あのね、・・・」と具体例をあげて説明します。この時、子どもは、エルマーの話に出てくるモノや登場人物の行動や場面から「知恵」という抽象語を学んだと思います。そして、小学校でもう一度この言葉に出会った時、具体例がたくさん思い浮かんで、生き活きとした言葉として学べ直すことができるでしょう。いいものに出会うとは高価なものではなく、子どもにとって本物ってなんだろう、意味があるものは何だろうと探求していったときに生まれるものだと思います。それが保育の醍醐味だと思います。

本園では朝礼の時、各学年の担任が、今日の予定や計画について前教職員に伝えるのですが、その前に、その日の前後の子どもたちの遊びや行動の傾向、発達や学びを語ります。全教職員が毎日それを聞きます。そして、子どもの学びや発達の連続性を理解していきます。先に5歳児担当のベテランの先生が言うと次の先生が視点を学び、その視点を参考にして言えるようになれます。新任教師も毎日それを聞くので理解していきます。15分という限られた時間でもこ

ういう学び合いのシステムがつかれるのだなど、私自身、学びました。こういったところは保護者には理解されない部分ですが、私は保護者の目に触れない教師の営みについて、これだけのことをやって園児を迎えていますよと折に触れて説明するようにしています。

子どもたちが遊んでいくと環境が乱れてきます。すると遊びが停滞し、壊れてしまうこともあります。それでいいのであればいいし、もっと続けさせたいと思えば、環境を再構成していく必要があります。子どもが帰ってからは、実践記録を一行でも二行でもとっておき、振り返ることができればいいと思います。この振り返りがあって初めて子どもの主体的で豊かな遊びや学びがより一層、深められるのだと思います。

遊び中心の保育・幼児教育

繰り返しになりますが、どんなに時代が変わっても、不易の課題として残しておくべき日本の幼児教育の良さ、基本というのは「環境を通して行う教育」です。子ども自身が探求していくと大きな力を発揮していきます。主体的な生活、遊びを通しての総合的な指導、一人ひとりの発達の特性に応じ、発達の課題に即した指導が必要です。例えば、はさみを使う力の個人差は大きいですが、でも、はさみを教えることだけが重要なのではなく、はさみや紙を使って、何かを作りたいという思い、この思いを育むことが大切です。それぞれの子どもの次の発達課題は何かを見取り、子どもが主体的に環境にかかわれるように、意図的・計画的な指導を行うことが基本となります。

遊びを通しての総合的指導を規定した要領・指針

今、要領・指針の「解説」では、幼稚園教育要領解説、認定こども園教育・保育要領解説、保育所指針解説書が出ています。しかし、要領が改訂されてきますので、もう少し学びを見取る視点とか、アプローチ期の充実、小学校との接続をどうやっていくかという記述が入ってくるかと思います。要領や指針を読むだけでなく、解説あるいは解説書を読むと非常に良く理解できると思います。

遊びを通しての総合的な指導とは

このスライドをみてください。遊びを通しての総合的な指導の一例ですが「転がす」という遊びをめぐって様々な学びが読み取れます。楽しさ、わくわく感、意見の対立と葛藤、順番にする、片付ける、試行錯誤と発見、様々な斜度、素材で実験・検証、転がり方に関する仮説構築等、同じような子どもの活動でも様々な読み取りができます。ですから、今、この子どもたちのここが発達や学びとして大事だと思ったら、それを深く読み取り、援助していくことになります。援助のタイミング、指導のタイミングを逃してしまったり、後からこうやれば良かったのに自分で思ったり、同僚から言われたりするかと思いますが、その繰り返しでポイントをつかめるようになっていくのではないのでしょうか。

遊びと学び

遊びと学びですが、段ボールの家を造る（5歳）の遊びの場合、作ろうとする家のイメージを抱く、作業の段取りを立てる、手順を考える、幼児同士がイメージを言葉で伝え合う、相手に合わせて自分の行動を抑制したり役割を実行したりする、用具の使い方、素材の特質を知る、

家の完成で達成感や友だちへの親密感などを高める等・・・いろいろな読み取りができます。遊びのなかには、小学校以降の教科書にみられるように、教科ごとに順番に整理されて並んではいませんが、たくさんの学びが至るところに散りばめられています。

遊びを通して豊かな学びが生まれるためには、教育課程、期間計画、月案、週日案など色々なレベルで保育の構想をしっかりとておく必要があります。そうでないと、子どもたちのなかに生まれている学びが読み取れないし、保育や遊び、生活が流れてしまいます。計画があつて読み取りや環境構成が可能になります。

保育者および第三者の記録から振り返り、子どもの経験を捉える 質の高い保育を支えるためのツール

一人ひとりの記録（文字、写真、映像、作品）により幼児の発達や学びの理解が深まり、履歴を残すことができます。記録がないと、その時に経験したことは記憶からどんどん失われていきます。記録は、教師の確かな成長を支えるツールですが、保護者にとっても、子どもにとっても、様々な学びや自己形成のツールとなります。ある種の記録は、子ども自身の経験の振り返りのツールになります。絵や写真、作品などからなるドキュメンテーションを子どもは喜んで見返します。過去の作品を見て懐かしがったり、あとき、絵を描くのがとても楽しかったなど過去の自分を想起し、また、年長になった今の自分からみると、随分、幼い絵だったり、今度、自分が描くときはもっとすごいのを描こうなど、自分の認識を過去、現在、未来へと繋いでいきます。また、教師自身の経験や思考の振り返りができ、長年の記録から自分の成長が読み取れたりします。それをもとにして、子どもの発達や学びを保護者に伝えることで、共通認識や共感が生まれます。保護者は、園での子どもの様子を理解したり、先生がしっかりと記録をとり、我が子を見てくれていると思い、嬉しさや教師への信を感じていくでしょう。子どもの多様な学びをパネルにして保護者に見せる方法もあります。

なぜ、子どもの主体的な活動を記録するのか

幼児教育のカリキュラムは経験カリキュラムといわれています。意図したカリキュラムを実践する場合、目の前の子どもや地域や学校の特性を生かして実践しようとする子どもとの学びの内容は、意図したカリキュラムから変わってきます。子どもの思いを大切にしようとするほど、実践されたカリキュラムは予定したものとずれてきます。教師はこれを観察して記録しています・が、教師の意図と子どもの学びの経験がずれている時があります。だから、その姿や内面を記録しておかないと思いきみに陥りがちになります。最初は目に見える行動の記録でもいいので、まずは書いていただき、次第に、子どもの内部で生じている経験を推論し、書いていければいいと思っています。

保育における振り返りと、学びの共同体としての園全体の取組

- ・質の高い保育は、保育者による自身の保育実践の記録と振り返りによって支えられます。記録を書くことで、自分の読み取りや思考が可視化されるし、幼児の内面の読み取りができるようになります。
- ・子どもの生き生きとした遊びは、そう簡単には生まれません。
- ・保育者の温かい人間性と確かな専門性、学び続ける姿勢をもとに、質の高い保育が生まれ、

子どもの生き生きとした姿が支えられていきます。

本来、幼稚園や保育所は、保育者が孤独に学ぶところではなく、先輩や仲間と学びあっていくところだと思います。安孫子先生も一人の成長が組織の成長、組織の成長が一人の成長とお話しされていましたが、保育の質の向上の鍵は、まさにそこにあるのではないのでしょうか。ただただ「反省」といっていても、何をどう改善するかはなかなか難しいのですが、しっかりと保育者としての自分をみつめ、幼児の読み取り、ねらいや内容の設定などの自分の思考を可視化していくことが一年目、二年目、三年目と積みあがっていくと、専門性が向上していくのではないのでしょうか。今年度中には要領が改訂され、来年3月には告示されるのではないかと思います。私たちは3歳児には何度か出会いますが、3歳の子にとっての担任は人生でただ一人ですし、その時限りですから、どのような保育者に会ってどのような保育を経験するかは、子どもにとって大きな意味をもちます。ここにお集まりの先生方は、日々、本当になんぼって保育をしていらっしゃると思います。います。記録を取り、自己や保育を振り返ることを通して、昨日よりは今日、今日よりは明日へと、保育の質の向上をめざしていただけたらと思います。



記録者：学校法人萩光塩学院

認定こども園萩光塩学院幼稚園

園長 坂倉典子

保育教諭 野村恭子